

働くということ

岡山県・岡山県立玉島高等学校 2年 真田 早紀

何にでもなれる気がしていた。何でもできる気がしていた。少し前までの、自分。別に私には特別な才能があるとか、私は優れた人間だとか、そんなことを思っていたわけではない。けれど、願った職業には必ずつける、と信じてやまなかった。自分の将来に不安を持ったことなど、なかった。その根拠のない自信は、もう過去のものになった。いつからだろう。「夢」に「現実」で蓋をするようになったのは。将来が見えなくなったのは。

定期的に行われる、担任の先生との面談が怖い。あまりに順調な下降を見せる成績と、「将来何をしたいのか」という質問が、私にぐさっと突き刺さる。自らの将来を堂々と話す友人に、焦る。漠然とした「不安」はどこまでも、深かった。

ある1人の友人は、高校卒業後は専門学校へ進学するという。成績優秀な彼女は、周りの人たちに大学への進学を勧められる。けれど彼女は決して自分を曲げない。自分の描いた夢へと、確実に歩んでいる。私は聞いたことがある。どうして専門学校にこだわるのか。すると彼女は、はっきりとこう言った。

「やりたいことがあるから。」

彼女が少し、大人に思えた。そして、こう続けた。

「少しでも早く働きたい。」

いつも一生懸命で、誰より責任感が強い彼女らしい答えだと思った。

——早く働きたい——いつまでも学生でいられたら楽なのに、と考えていた私に、その言葉が引っかかった。なぜ働くのか。何のために働くのか……。もしその答えが見つければ、私の中にある漠然とした「不安」は、消えるかもしれない。「目標」が見つかるかもしれない。私はそのことの意味を、探しはじめた。

その時、1番はじめに思い出したのは、私にとって最も身近な社会人である父の一言だった。

「今の職場は、父さんがいないと成り立たないからな。」普段はお世辞にも外向的とは言えないような父が、この時ばかりは自信たっぷりに言った。大企業の下請け会社で、目立つ仕事ではないけれど、そこにはきっと確かに、父の「居場所」があるのだろう。いまだに父の働いている姿は1度も見たことはないのだが、いつも家でジャージを着てゴロゴロしながらテレビを見ている父からは想像ができない程、生き生きとしているのであろうということは、想像ができる。そんな父の姿を思い浮かべると、働くということが、素敵だと思えた。

けれど現代の日本は、どうだろうか。若年層の失業率の高さ、NEETの問題、フリーターの増加……そして、就職あきらめ組は67万人にのぼるといふ。これらの問題に対する答えは、ない。けれど16歳の私なりに言えること、いや、私だから言えることがある。それは、

問題の原因は、人々が働くことの意味を見失っている、ということだ。私のように、何のために働くのか、なぜ働くのかがわからず、目標が曖昧になっている人が、実に多い。けれど私は父の何気ない一言に、確かに何かを貰った。以前、新聞を読んでいた時、「1人ひとりが『働く意味』を取り戻し、見直すきっかけとなるのは、親や子、友人、先生といった身近な人たちとのふれあいや何気ない会話などだ。こうした機会を通し、働く喜びを伝え合うことが大切だ」ということが書かれていたことが、強く印象に残っている。まさにそうなのだ。別に大それたことでなくていい。ほんのささいな会話からでも、働くことの喜びを感じることはできるのだ。

さて、私自身にも、働いた経験はある。中学2年生の時の職場体験で、私が職場に選んだのは、小学校だった。体育の授業ではサッカーを教え、音楽の授業ではオルガンを弾いた。テストの採点もしたし、休み時間は児童と一緒にグラウンドを駆け回った。担当したクラスの子たちは、私を「早紀先生」と呼んだ。そのどこか恥ずかしい響きに、私は胸を弾ませた。そこには私の居場所があったのだ。たった2日間。それでも職場に父の居場所があるように、私の居場所も、確かにそこにあった。「明日も来てほしい」と言ってくれた子や、たくさんのシールを貼ったお手紙をくれた子。私の存在する場所を与えてくれた。

働くということ。その意味・意義を、高校生である私が、言葉で説明することなんて、できないけれど、今、必死に模索している私が見つめることができた答えが、ひとつだけある。働くということ——それは、存在証明。生きているという証ではないのだろうか。自分を見つけ、自己を表現する。そしてそれが結果的に誰かのためになっていたり、何かのためになっているのかもしれない。そしてその時、自らの「居場所」が見出せるのではないだろうか。

私は中学生の時始めたバスケットボールを今も続けている。その中で、私がいつも心に置いている信念。「自分にしかできないことを見つける。」ボール運びからリバウンドまで、全てをこなせるスーパーエースになれば、それはいいかもしれない。けれど顧問の先生はいつも言う。

「全てができるプレイヤーにならなくていい。自分にできること、自分の役割を果たしなさい。」それは、働くということにも繋がっているように思う。自分にしかできないことは、きっとある。それを見つけ、生かす。そしてそれが果たすべき役割であり、使命なのだ。

今、部活の中で必死に見つけようとしている「私にしかないもの」を、これからは、社会という中で探していきたい。居場所に出会うために。自らの存在証明をするために。生きている証を、手にするために。